

野における太一郎研究の集大成

西村 卓

先日、鳥取県立公文書館発行の『研究紀要』第四号を手にした。収録論文の一本「稲作における県農政と中井太一郎の普及活動―郡立農学校の創立と林遠里招聘を中心に―」の著者大島佐知子さんからの寄贈である。

大島さんとは、ここ一〇年来の研究仲間であり、彼女が中井太一郎の曾孫にあたり、太一郎の研究をしたいという情熱に打たれて、アドバイザー的スタンスで、彼女の調査・研究に寄り添ってきた。その関係で、今回の投稿を引き受けることにした。

日本が明治維新という変革の大きなうねりを経験し、近代社会へとその社会的・経済的構造を変えようとしていたまさにその時代、農業の部面で「老農」といわれる数多く

の有名・無名の農事改良者が現れ、地元に根付きながら活動を続け、はたまた全国にその活動の場を広げていった人物も現れてきたのである。明治三大老農といわれた中村直三、船津伝次平、奈良専二、林遠里（中村死後に加えられたという）たちの活動は、その時代の雰囲気象徴したものであった。

そのなかにあつて、鳥取県の老農中井太一郎は、この時代に唱導された改良法の総体的技術体系のうち、稲苗の正条植えの普及とともに、中耕除草をより簡便に効率よく可能にした「太一車」の開発者としてその名を馳せ、戦後の農業史研究でも『日本農業発達史』（中央公論社）、さらには『明治農書全集』第一一巻（昭和六〇年、農山漁村文化

協会）にも、彼の業績が紹介されている。

しかし、それらはいくまでも中耕除草器「太一車」の考案者としての紹介であり、彼の普及しようとした農業技術の総体を把握したものとはいえない。鳥取県という風土のなかで、老農としての資質を涵養し、従来知られていた以上に、多くの老農や農学者と交流し、その活動は、明治三大老農といわれた人物と比肩される、否、それ以上の広がりをもって展開されたことが、大島さんにより明らかにされつつある。

大島さんはこの論文のなかで、太一郎の農業技術に影響を与えた風土と営みについて、「太一車」の歯と江戸時代以来の伯耆国倉吉の特産品であった千歯の歯とが類似している」と述べているが、地域に根ざした老農太一郎の農業技術総体の特徴をとらえたものとして重要な指摘であろう。

このまなざしは、中井太一郎のライフ・ヒストリー全体を描き、彼が文字通り全国的にその活動を広げていった内容を記述していく場合でも、大島さんは持ちつづけられるに違いない。

大島さんの研究は、まだまだ続く。今回の論文は、そのほんの一部分を明らかにしたに過ぎない。太一郎研究の総体が我々の前に示されることを今か今かと待ち望んでいる。



周防大島文化交流センター（山口県）を訪問した大島佐知子氏（左）。民俗学者・宮本常一が収集した農具・民具が並ぶ。

平成20年5月10日撮影

〔追記〕本書評は、地元紙掲載のためにご投稿頂きながら、当館の手際で未掲載となってしまうものである。あらためて本号に掲載すると共に、玉稿をお寄せくださった西村卓教授に厚くお礼申し上げます。